

Q

〔著者略歴〕

佐川光晴（さがわ・みつはる）

1965年東京都生まれ、茅ヶ崎育ち。北海道大学法学部卒業。
2000年「生活の設計」で第32回新潮新人賞、2002年『縮んだ愛』
で第24回野間文芸新人賞、2011年『おれのおばさん』で第26
回坪田譲治文学賞、2019年『駒音高く』で第31回将棋ベンク
ラブ大賞文芸部門優秀賞受賞。このほかの著作に『牛を屠る』
『大きくなる日』『鉄道少年』『満天の花』などがある。

ねこ
猫にならって

2023年2月5日 初版第1刷発行

著者／佐川光晴

発行者／岩野裕一

発行所／株式会社実業之日本社

〒107-0062

東京都港区南青山5-4-30 emerge nce aoyama complex 3F

電話（編集）03-6809-0473 （販売）03-6809-0495

<https://www.j-n.co.jp/>

小社のプライバシー・ポリシーは上記ホームページをご覧ください。

DTP／ラッシュ

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／大日本印刷株式会社

©Mitsuharu Sagawa 2023 Printed in Japan

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製（コピー、スキャン、デジタル化等）・転載することは、法律で定められた場合を除き、禁じられています。また、購入者以外の第三者による本書のいかなる電子複製も一切認められておりません。

落丁・乱丁（ページ順序の間違いや抜け落ち）の場合は、ご面倒でも購入された書店名を明記して、小社販売部あてにお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。ただし、古書店等で購入したものについてはお取り替えできません。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-408-53819-8（第二文芸）

目次

第一話	ミー子のおしえ	5
第二話	やさしく透きとおる	23
第三話	それぞれのスイッチ	59
第四話	男の子たち	107
第五話	エイミー先生	139
第六話	気になるあのひと	181
第七話	逃げればいい	221
第八話	猫の恩返し	261

ミカズは中学三年のときにガラス製品に興味を持ち、大学生になって本場のイタリアに旅行した。その後大学で佐藤さんという女性に、訪れた沖縄で由太郎さんというガラス職人と出会った。

イタリアの街があまりにすばらしくて、じつは困っていた。古代から中世、さらには近代へと、豊かで濃密な暮らしが連綿と受け継がれてきたヨーロッパの都市を知ってしまおうと、東京でさえ、急ごしらえの半端な街に見える。まして札幌はさらに歴史が浅い。「ローマの屋台で食べた、牛モツのサンドイッチが異様なほどうまかったんだよね。一杯百円もしないワインもおいしくてさ。大通公園でトウキビをかじりながら飲む生ビールもおいしいけど、はつきりそれ以上だと思った。それに街角で奏でられる音楽も、いかにも街にとけ込んでいてさ。つまり、ぼくらより、イタリアの連中のほうが、真っ当な手ごたえのある生活をしているってこと。でも、由太郎さんが作ったガラスの杯で飲んだ泡盛と干しタラの組み合わせは、ローマの屋台に負けていなかったんだよね。少なくとも、北海道と沖縄には可能性がある。それがわかったのが一番の収穫だった」

胸に手を当てて聞いていた佐藤さんが緊張した面持ちでうなずいた。そしてミカズが「たしかに、ぼくに運がまるでないわけじゃないけれど、あなたがくれた応募ハガキだから、当選したとも言えるわけですからね」

ミカズはかつてなく高揚していた。いまなら、好意をうちあけてもかまわないわけだが、一度断っているという負い目がある。それに由太郎さんにも女性関係は慎むように戒められていた。

「あなたみたいな男ぶりだと、女性が放っておかないでしょう。でもねえ、誰かれかまわず応じてちゃダメだよ。勘が鈍るし、運も逃げる。だいじょうぶ、苦しいときに手を差し伸べてくれるひとがあらわれるから」

無用な疑いを招く必要もないので、その忠告は佐藤さんに教えず、ミカズは由太郎さんから吹きガラスの手ほどきを受けたことを話した。

お世話になった三日間、ひたすらガラスを吹いていた。観光客の体験ではなく、師匠に鍛えてもらう弟子のつもりで、高さ十センチのコップをいくつも作った。おかげで、これまでの何倍も、ガラスがわかった気がする。

「研究室でもガラスを吹くつもりだから、自信作ができたなら、差し上げます。そう思っ

て、出来合いのお土産は買ってこなかったんだ。でまかせで言ってるんじゃないからね」

ほとんどプロポーズをしている気持ちでミカズは言った。

「ミカズさん、どんな世界が広がっていますね。そして深まってもいい」

「うん。自分でもそう思う。でも、かえって身の振り方がわからなくなっている気もある。春休みに、もう一度ヴェネツィアに行くんだ。チェコのプラハにも。最初にイタリアに行く前から決めていたことで、おさらいのためとか、最初はどうしたって興奮しちゃうから、ヨーロッパの街をおちついて見直すためなんだけど、あいだに沖縄に行

けて、本当に良かった」

ミカズはさらに、いつか自分の工房をかまえて、ガラス作りをしたいと言った。

「趣味じゃなく、それを生業にしたい。ただし、いまのぼくじゃあ、とても無理だというのわかってる。いろいろな場所に行つて、いろんなひとにあって、もっと自分を鍛えないと、存在感のあるものは作れない」

「また話を聞かせてください。でも、三年生になったら、おたがい、いま以上に忙しくなってしまうでしょうね」

残念ながら佐藤さんの予想は当たり、ふたりはそれぎりゆくり話す機会を持てないまま、卒業の日を迎えた。しかも式場に佐藤さんの姿はなかった。

土木工学科の学生に聞くと、佐藤順子さんは祖父の容体が急変したため、埼玉県の家に帰っている。自分たちも佐藤さんと一緒に卒業したかったので、残念でならないという。

十一月のはじめに、工学部のローンで鉢合わせしたとき、ミカズは大手企業に就職することを伝えた。表参道に独身寮があり、そこに入ると言うと思うと、佐藤さんは埼玉県の教員採用試験に合格したという。もっと話したかったが、こちらも急いでいたし、むこうも時間がないようだった。

まさか、それが北大のキャンパスで会う最後になるとは思ってもみなかった。

ミカズは佐藤さんに渡すつもりだった手製のティーカップとコップを木箱に納めたまま、四年間の大学生活を終えて内地に戻った。

入社して四回目の春が来たとき、二十五歳のミカズは企業の研究職を続ける意欲を失っていた。新部長は一年で退き、元の部長が返り咲いたものの、だからといって新素材の開発に展望が開けたわけではなかった。

ミカズが会社から期待されている役割は、根気のある、精度の高い実験要員でしかない。やはり、なりゆきまかせなどと、呑気なことを言っているはいけなかったのだ。

ミカズが行き詰っていることは、由太郎さんにはお見通しだったのだろう。前年の年末に竹富島を訪ねたとき、一冊のノートを渡された。秘伝ともいえるガラスと金属の配合、それに炉の温度と加熱する時間が詳しく書き記されていて、ミカズは驚いた。

「いづれ、自分なりのガラスを生みだすにしても、まずは食べていかないとね」

由太郎さんはもう友人のためにしかガラスを吹いていない。唯一取引のある銀座の画商に宛てた紹介状も渡されたが、それでもミカズはふんざりがつかなかった。

一九九〇年代なかばの日本経済は、一時期の勢いを失いつつあった。しかしミカズの目に、ひとびとは相変わらず浮かれているようにしか見えなかった。

飴色に溶けた高温のガラスに立ちむかい、精魂込めてコップや杯を作ったとしても、それを大切にしてくれるひとたちの姿がイメージできない。

佐藤さんに会いたくても、実家の住所がわからない。工学部の同窓会に問い合わせればわかるのかもしれないが、こんなでいたらくでは、とても顔を合わせられない。

神宮外苑^{じんぐうがいえん}への深夜の散歩を唯一の気晴らしにしながら、ミカズは浮かない日々をおくっていた。もっとも、夜空を眺める余裕はなく、パークのフードで顔をおおい、足元は編み上げ靴で固めている。初めて沖繩に行ったときに、那覇の国際通りで買った、底の厚い、頑丈な靴で、札幌の雪にも余裕で耐えた。

四月もなかばをすぎ、去年までなら、ゴールデンウィークの竹富島行きを指折り数えていた。しかし、由太郎さんにはもう甘えられない。おめおめ訪ねて行って、キキに阻まれたら、とても生きていられない。耳の尖った大型の猫は、由太郎さんが認めたひと以外を家に寄せつかなかった。

「火事だ」と声がしたのは、独身寮の近くまで戻ってきたときだ。パチパチと音がして、裏通りの一角が急に明るくなった。

引き寄せられるように駆けてゆくと、「助けて、こどもがまだ二階に」と母親らしい女性が泣き叫んでいる。

燃えさかる家に飛び込んだミカズは、炎に包まれた階段をのぼりながら、自分のからだ^みが飴色に溶けてゆく気がした。

「ぼくは溶けてもいいけど、抱きかかえたあの子は、溶かしちゃいけないと思ったんだ

なあ」

意識を取り戻した病院のベッドで、ミカズは三年半ぶりに会う佐藤さんに語った。すると、滂沱^{ぼうた}の涙が流れて、とまらなくなった。

焼け落ちてきた壁板で肩から背中にかけて大やけどを負ったミカズは、うつ伏せのまま泣き続けた。パークのフードのおかげで頭と顔は無事だったが、全治三〜四ヵ月の重傷と診断された。履いていたのが軍靴でなければ、まちがいなく両足を失っていたという。

佐藤さんは毎週土曜日の夕方、都心にある病院にやってきた。そして三〜四時間をもにすぎし、消灯時間の午後九時前に帰ってゆく。

深夜の火事を報じた早朝のニュース番組で、救出された男の子は軽症だが、近くに住む会社員の岸川ミカズさんは意識不明の重体と報道されたため、佐藤さんは気が動転したという。

「おたおたしていたら、母に叱られたんです。『なにがあっても、教員のつとめを果たしなさい。このひとだって、命がけで、ひととしてのつとめを果たしたんだから』って。それで出勤はしたんですけど、昼休みの職員室で、母からの伝言を記したメモに、『岸川さんは意識を回復したそうです』とあるのを見たたん、泣きぐずれてしまいました」

消火活動によって負傷した民間人に対しては、行政が治療費の全額を負担する。まさに、一命を賭^かしての救助だったため、ミカズは渋谷区長と東京都知事から表彰された。会社からは見舞い金が支給された。さらに全国のひとびとから称賛の手紙やカンパ、それに見舞いの品が送られてきた。

ミカズは東京での苦しかった日々を佐藤さんに話した。そして母に頼んで独身寮の部屋から持ってきてもらったガラスのティーカップとコップをようやく手渡した。

ティーカップの持ち手をレンガ色にしたのは、沖縄旅行のあとに北大構内で食事をしたとき、佐藤さんが着ていたセーターがとても似合っていたからだ。そそいでお茶が自然にゆれるように、ティーカップの側面や底がゆるやかに波打っている。

高さ十センチの淡い青色のコップは、由太郎さんに手ほどきを受けた琉球ガラスだ。廃材のガラスをふつうより長い時間、高温で熱することで、混入する気泡を少なくするのが特徴で、かたちもすっきりしているが、琉球ガラス特有の温かみは失われていない。「ミカズさん、わたしの話を、途中でさえぎらないで、最後まで聞いてください」

病室のソファにかけた佐藤さんが、いつにも増して真剣な顔で言ったのは、七月の下旬だった。きのうが一学期の終業式で、きょうから夏休みに入ったという。

ミカズは起きてベッドに腰かけた。背中やけどはかなり癒えて、八月中に退院し、九月一日から職場に復帰することになっていた。

「わたしの実家の敷地に工房を建てますから、そこでティーカップやコップを作ってください。いまの会社を辞めて、ガラス作家として身を立ててください」

佐藤さんは旧家の一人娘で、ともに教員をしていた両親は三年前の三月三十一日にそろって定年退職した。母親は家にいるが、父親は請われて幼稚園の園長をしている。

先日、担当の医師に尋ねたところ、半日なら外出してもかまわないそうだから、一度家に来てほしい。そして庭のどこにどのくらいの大きさの建物を造るのかを、具体的に考えてほしい。

「わたしたち、いまさらふりだしから始めて、双六^{すごろく}のマス目をひとつずつ進んでいく意味はないと思うの」

佐藤さんの言いたいことはよくわかった。きっと、どう言えばミカズを傷つけずに済むか、頭を悩ませたにちがいない。

（こんな大ケガをする前に、自分でふんぎりをつけていたら）

かなしみが胸をよぎり、背中^{うす}の傷が疼いた。すると、由太郎さんのことばが思い込^こまれた。

「それは、運命が決めることだからよ」

会社を辞めたりとは言わないとはぐらかしたあとに、由太郎さんはそう続けたのだ。

（ようやく、そのときが来たのか）

涙をこらえて大きく息を吸うと、力がみなぎった。

「たしかに、ふりだしに戻って、交際を一から始める意味はない」

立ちあがったミカズが右手を差し出すと、顔を赤らめた佐藤さんが右手を重ねた。そして佐藤さんの実家を訪ねた翌週、ミカズは両親を伴い、ふたたび佐藤家を訪れたのだ。

八ヵ月後に、夫婦の新居と工房ができあがり、カマド開きには由太郎さんが竹富島からわざわざ来てくれた。

順子との結婚を知らせる手紙に、火災救助での大やけどのことも遅ればせながら書くと、毛筆で宛名がしるされた封書が届いた。

「こりゃあ、よっぽどのひとだ」

書道に心得のある有一さんは、由太郎さんの筆跡にさかんに感心していた。校長をとめていたときには、卒業生全員の氏名を、みずから卒業証書にしたためていたという。

「ミカズちゃん、良縁に恵まれたね。ぼくが言ったとおり、身を慎んでいたおかげさ」

由太郎さんはそう言って、有一さんと和代さんと順子、それに岸川の両親に、ミカズとの出会いと、自分が授けた忠告を披露した。

「三年のあいだ、一日に作るのは三つ。どんなに多くても五つ。まずは、こちらのご両親と、代々守ってきた見事なお庭になじんでさ。自分が作ったガラスで稼ぐのは四十歳

くらいからのつもりで、たっぶり、寄りかからせてもらおうといいさあ」

由太郎さんの新たな忠告を容れて、ミカズは一日に三つか四つ、もしくは五つ、淡い青色のコップを作った。あとの時間は和代さんと一緒に庭の雑草を抜き、落ち葉を掃き、木々に水をまいた。

ご近所の方々に会えば挨拶をして、スーパーに買い物に行き、洗濯物を取り込んだ。帰ってきた順子が話す高校での出来事に相槌を打ち、ふたりで枕を並べて眠った。日曜日はガラスを吹かなかった。

カマド開きから三ヵ月ほどがすぎ、淡い青色のコップは二百個になった。ミカズはひとつずつ梱包し、箱に入れて、手紙を添えた。

送り先は、やけどを負ったミカズに、手紙やカンパ、それに見舞いの品を寄せてくれた全国のひとたちだ。病院の医師やスタッフにも送り、退社してガラス作家として活動してゆくことを伝えた。もちろん、火事にあった家族にも送った。

渋谷区長と東京都知事、それに入院中に取材にきた新聞社とテレビ局にも送った。日を置かずに連絡があり、カメラマンをとまった新聞記者とテレビ局のクルーが朝霞の佐藤家を訪れた。

インタビューの様子は、全国紙の囲み記事と、ニュース番組での特集となった。とくに、テレビでの放送のあとは注文の電話が何日も鳴りやまず、おかげで最初の一年は淡